慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文学における女性像 : 近世イギリスについて一言
Sub Title	Modern English literature
Author	由良, 君美(Yura, Kimiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.46- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学・ 芸術に現われたる女性像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学における女性像 ― 近世イギリスについて一言

由良君美

(1)

ただいま、三人の講師の方々から、独乙・中国・日本にかんして概論が提出されました。敢えて要約させて頂きますと、ドイツは「形而上的」、日本は「即物的」(性愛密着的ということでありましょうか)、中国は上記の双方、といったようなことになるように拝聴いたしました。近世イギリスについて補論させて頂く都合から、主としてドイツに関しての御話しに関聯せざるをえないことを、まず許して頂かねばなりません。

ドイツの場合の扱い方につき、安東・松原の両氏から中世ヨーロッパ文学の汎ヨーロッパ的統一性に注意すべきである、という発言がありました。これは逆の意味で、ヨーロッパ諸国文学の特質の顕著な分化は近世において著しくなったものである、ということになり、私としては大いに緊張せざるをえません。また、高山・大浜の両氏から、フランス近世文学の「悪魔的女性像」についての――バルザック、ボオドレエル、カゾット、ドオルヴィリーなど――御発言がありました。これはイギリスの場合にも重要な事柄に属します。

従って、諸氏の御発表・御発言を発展させ、論点の拡散を極力避けることを目指さすべき建前から、次の二点に集中して述べて参りたい。(a)近世諸国文学の多様性のなかに置いた場合、ドイツ的特性とイギリス的特性はどのように対比されうるか。(b)悪魔的女性像とイギリス的特性との関係はどうであるか。

(2)

ドイツ的特性は、中田氏の御説明によれば、総じて男性の憧憬の原理的なものの理想像、つまりゲェテ的な「美しい魂」とシラー的な「優美」とに究極するような悲劇の女性像のようであります。このような「形而上的」女性像や、ダンテのベアトリーチェ像のような「天上的」といって差支えない女性像は、近世イギリスの文学の勝義の特性とすることは全くできそうにありません。ダンテはベアトリーチェを、あんなに雲の彼方に押しやり、一切の地上的「性」を脱色してみたが、現実には子供をゴロゴロ生んで女房と暮していた男ではないか、といったような至って健康な現実感覚から、どうしてもフッ切れない所に、イギリス文学の栄光もあり悲惨もあるように思われます。

ドイツ文学の女性像を悲劇的形而上性にあると規定する意味では、イギリスのそれはこれに対し、喜劇的形而下的であります。イギリス近代文学の遺産にあのように無視できない重さを与えているものは、一八世紀小説に始まり現代にまで貫流するノミナリスティック・リアリズムの伝統[1]であります。近代市民社会を最も早く典型的に完成したイギリスは、向上するブルジョアジーの世界観を前提にし、それを体現した小説を開花させ、このような小説を正統とすることができました。すなわち、デフォー、リチャードスン、フィールディング等の一八世紀小説群であります。たとえば、デフォーの場合ですと、『ログザーナ』や『モル・フラーンダァズ』のごとき、奔放な娼婦的女性の、本能と打算むきだしの遍歴の生涯を多彩に描きあげたものが挙げられます。これには、『ロビンスン・クルソー』に、あるいは『イギリス紳士大全』にみられるブルジョア経済倫理の推進者デフォーの人間観[2]が裏打ちされております。リチャードスンの場合は、向上的ブルジョア社会と貴族社会との間の価値観の落差を、下女の生存状況に焦点を合わせることにより、内面心理の描写として提出したものであり、リチャードスンの個人的倫理観が終局的に貴族倫理に傾いていたために、デフォーのようなピカレスク

性が欠如しているとはいえ、当時の向上階級の女性の内在的矛盾に一層密着しているのであり、教訓的外装のなかに、市民倫理の打算的積極性にたつ女性像が、やはり定着されております。つぎのフィールディングにおいて、このような二つのブルジョア倫理の総体像は、遺憾なく展開されました。『パミラ』のパロメディーとして意図されたフィールディングの出世作『シャミラ』[3]は、リチャードスンの女性の、前述の意味での教訓性・貴族倫理への終局的妥協性を、今日の言葉で申せば、カマトト的なものとして、完膚ないまでに野次り倒し、デフォーの娼婦型女性と、リチャードスンに内在する打算的積極型女性を一体として、下女の階級的上昇と本能の充足とを一元的に肯定し、喜劇精神で横溢させることに成功しております。『ジョーゼフ・アンドルーズ』をはじめとする続く彼の諸々の大作は、健康な市民的女性の群像の、ほしいままな一大オンパレードと申すべき性質のものであります。これを要するに、娼婦性・打算性・積極性・喜劇性を特徴とする、形而下の本能の開花・充足のなかに女性本来の在り方をみようとするものであり、「欲望」と「自愛」――いづれアダム・スミスによる体系化をうける筈の――という市民社会の二大倫理原理に[4]動かされた、ピカレスク的市民社会風俗小説が、彼等の世界であり、これが、イギリス小説の正統を形ちづくったところに、イギリス小説の特性が生じております。これは、のちのサッカレ、デイケンズ等による風俗小説、ジョージ・エリオットの思想小説に連らなり、ある意味で、シリトーに流れ入る伝統であります。

このようなイギリス市民社会風俗小説の女性像と対比しますと、ドイツ近世小説の場合は、著しく異ったものと考えられます。ドイツの、形而上的な悲劇の女性像――「永遠に女性なるもの」――は、中世以来のドイツ神秘主義（ミスティーク）、ドイツ敬虔主義（ピエティスムス）による内面性の伝統が、近代ドイツの特徴である市民社会の未成熟とその近代化の閉塞状況により、特殊な事情をドイツ古典主義文学の背景に生みだし、そのため、未成熟のゆえの市民社会理念の理想化・抽象化を促し、ハイネの所謂「ドイツ的みじめさ」の現実との間の緊張関係のなかで、鋭く観念に傾斜した女性像を生みださざるをえなかったためと考えられます。向上ブルジョアジーの権利闘争的側面を衝動とする本能肯定思想が、現実の多様性の肉化としての喜劇的女性像をタペストリさながらに繰りひろげたイギリスの実例とは、あまりにも異っていることに注意を促したいと考えます。

(3)

さて、この市民社会風俗小説が、スターンやマケンジーにより、「感情人」としての人間の、内面心理描写へ深まる新生面を経過[5]しながら、ロマン主義時代に入ると、ここにもうひとつ顕著なイギリス文学の女性像が生じ、ドイツ・フランスとの接触点がでてくるように思われます。

ロマン主義はイギリスの場合一八世紀後半に始まるのでありますが、顕著にロマン主義的形態をとる契機となったのは、フランス革命とその帰趨の及ぼした衝撃であります。[6] とりわけ産業革命の本場であり、それにより生じた産業社会の生長が他に比類ない高度性を示していたイギリスにおいては、市民革命による社会経済的諸矛盾の克服（貴族的寡頭政に基く前近代的政治権力・産業革命に基く資本主義的諸矛盾の双方の回避。）の要求は特殊な激烈さをもっておりました。それだけに、フランス革命の挫折――（ジャコバン独裁→恐怖政治→ナポレオン独裁。）と一七八一～二年を境とする国内の反革命体制の強化による知識人の一勢転向の[7]二つがもたらした「幻滅」は深刻でありました。市民革命への展望がこのように急激に閉された所から、創造的エネルギーの内向化が生じ、一八世紀小説に具現された喜劇的現実主義の百花斉放状態は、前ロマン主義の「感情人」を強調する個人主義的傾向とこのエネルギー内向化とが相結んだ潮流の前に、急激な変質を生じました。思想的にはブルジョア合理主義の掲げる理性にたいする批判の形態をとり、市民社会の未来像を懐疑する「自然・農村（独立小生産者共同体）」への回帰に意味をみいだし、現実悟性界よりは想像力と神秘主義の世界に充足をみいだすことにより、イギリス・ロマン主義は、独仏のロマン主義と等質の空間に突入することになります。この段階で女性像にとって重要なことは、ルネサンスのファウスト像が、ロマン的解釈のもとに新たな意義を帯び、「人神」ファウストの問題が、とくに挫折像に変容し、その悪魔の契約の媒介者である女性――悪魔的女性像――が、ロマン主義文学の著しい主調を奏ではじめたことであります。この時期におけるドイツ文学の影響――とくに、シュトゥルム・ウント・ドゥラング文学の影響は著しく、ビュルガー、ヴィーラント、コッツェブー、初期シラーの導入は決定的であります。[8] 若いスコットを始めとする飜訳者は、イギリス独得の恐怖小説群を現出させる力となり、女性のリテラシーの上昇と相埃ち、広汎な読者層の支持の下に、今日の推理小説の原型である、スリル・性・暴力・

その他あらゆる暗黒勢力を動員する、奔放な想像力小説が登場いたしました。ウォルポールの『オトラント城』、M・G・ルイヌの『マンク』[9]、ラドクリフの『シシリア綺譚』、『ユードルフォの神秘』、マチューリンの『バートラム』、『不死のメルモス』[10]などは、単に怪奇性の強調、荒唐無稽のものというより、むしろ、近代社会の矛盾の認識が前述の挫折により内向し、その内向化の過程において、想像力の内面における個人の全面的解放をめざした所に生じたものであり、女性の読者層に支えられた事情も絡み、この想像力による幻滅の認識と個人の深層の開放が女性像に与えた大きな転機にこそ意義があり、かかるものとして把み直される必要があると考えます。恐怖小説のゴシシズムといわれる態度が造型した女性像は、ルイスの『マンク』に典型的なものをみるような、エロスの力をほとんど反世界の極限にまでわたるものに延長し、人神としての男性が現実の束縛を超越する際の契機となるデーモン的なもの、永遠のユダヤ人に男性を駆りたてる永遠のエロスの相貌を帯びるに至ります。このような、性の力において自然的でありながら、存在論的な意味において超自然的である女性像は、ロマン主義文学の反世界性に消しがたい痕跡をのこしました。ワーズワスのごときは、女よりは虹の方に夢中であった男ですから、この際、問題外として、コールリッジなどは、幽遠な抒情的彫琢のなかに、作品の動力として、このような超自然の悪魔的エロスとしての女性を必ず登場させ、主人公を実存的世界認識に投入さすモメントとして、かかる女性像を背後に置いております。[11] キーツの「つれなきたおやめ」もシェリの『チェンチ家』の女性も、バイロンの『ドン・ジュアン』の女も、すべてかかるものであります。非存在への扉としての反世界の女性、要するに、エロスの抽象化による怪奇的な悪魔的形而上の女性は、イギリス・ロマン主義の描いた無視しえない類型であり、シュール・リアリズムからシンボリズム、アンチ・ロマンに至る二〇世紀小説の世界認識に重要な腐葉土を提供したものというべきであります。イギリス小市民階級はフランスのそれとほぼおなじ課題をもっていたことから、恐怖小説のフランスへの影響が生じ、マチューリンのバルザックへの影響の大きなことなど、わたくしが改めて申すまでもございません。ドイツにおいては、小市民的急進主義の荷い手であったシュトゥルム・ウント・ドゥラングは前述のようにイギリスの恐怖派＝ロマン主義に霊感を与える力をもちながら、やがて、古典主義による現実的妥協の調和的世界のなかに埋没してしまい、ゲーテ等はイギリス・ロマン主義に積極的な意味をもち得なかったのは見やすい道理であります。

(4)

このようなロマン的女性像は、その想像力偏重と反世界性のために、もちろん、一歩誤れば、全く馬鹿げたものとなる危険性をもっております。その意味で、恐怖派の仮構世界の弱点に真摯な眼を注ぎ、ドイツにおける、ビーダーマイヤー的な世界のなかに、むしろ人間性の永遠の在り方をみようとする者がでて参り、ジェイン・オースチンの秀作群は、これらのものに属します。『ノーサンガー寺院』が前出のラドクリフの恐怖作品に対する朗らかなパロディー[12]として成立した事情は有名であり、田舎の村のつつましい家族の小単位構成のなかにうかがわれる、日常平凡のうちにひそむ恒常のものの姿を、独自の調和的世界として、溢れるばかりのヒューマァをこめて書いたものと申せますが、その女性像など、どうかすると、シュティフターのあるものなどに、アッというほど似ております。こういう、田舎びた小世界の調和的女性像は、ワーズワスやコールリッジ等にもみうけられるもので、ロマン派の一面でもありますが、[13]やがて、ヴィクトリア朝以降に入るに及んで、とくにジョージ王朝において、単なる田園趣味に堕落し、世界観としての意義を失うに至ります。

ロマン派の積極面は、エミリ・ブロンテのような孤立人のなかに、強い水脈を引いて流れ入っております。『嵐が丘』の、地獄とデーモンに引き裂かれ、傲慢・嫉妬・憎悪・奸計のひしめく反人間主義的な超自然の世界と、そのなかでのキャサリンにみられるような清冽なエロスとしての女性像の構築は、全く、ロマン派の反世界・負の世界の精神の系列であり、疑いもなく、イギリス文学に高度の世界性を与えているものに属します。

このロマン主義の描く女性像は、やがて、恐怖派以来の遺産を背負ったまま、アメリカに伝播し、チャールズ・ブロックデン・ブラウンの恐怖小説や、とくにエドガー・ポオの比類ない頭脳のメカニズムの宇宙で再生産されます。ポオの美学がコールリッジに深く負うものであることは文学史の常識ですが、ポオの反世界の恐怖を起動力とする大脳的な推理小説は、ロマン派の悪魔的女性像のアメリカ版[14]——エロスの抽象化による負の世界の創造にほかならないことは、D・H・ロレンスが慧眼にも指摘したとうりであり、この女性像はフランス象徴主義詩人に新しい精神の糧となったことは、云うまでもありません。

(5)

つぎに、副次的に注意しておく必要のあるものに、ブルー・ストッキングスの系列があります。すでに早く、市民社会の成熟に伴う女性の地位の向上により、ジョン・ロックをめぐるサークルや、ドクタ・ジョンスンをめぐる青踏派女性が出現し、単なる才媛から、男性と対等の立場で、女性の権利を獲得するという方向を志向する女性を輩出し、イギリスの特殊な伝統と化している観すらあります。早くは一七世紀に、『結婚一〇のよろこび』をあらわしたアフラ・ベイン女史のような散発的な例がありますが、やはり、一八世紀以降の潮流とみるべきで、ハンナ・モア女史の『村の政治』[15]など、反革命プロパガンダを女性が書くほどになっております。ウイリアム・ゴドウィンの小説『ケイレブ・ウイリアムズ』[16]は推理小説の鼻祖として、ポオからも讃められたものでありますが、まことは、この偉大な思想家の思想小説であり、社会改革の意図を秘めております。彼の恋女房、ウルストンクラフト女史[17]は「女権論」の著者であり、その娘メアリはシェリの妻として、恐怖派のテクニークに従った小説を幾つか書いており[18]、いづれにも、親ゆずりの女権思想を仮託された女性像が隠顕しております。社会のなかで女性の政治的権利を獲得し、対等な両性関係を実現することに女性のあるべき姿をみようとする流れは、J・S・ミルの思想やその妻ハリエット・ティラー夫人の女性の隷属への激しい抗議[19]となって、ヴィクトリア朝の安定社会のなかで、次第に厚みをもったものとなります。ジョージ・エリオットのような巨人は、このような、イギリスの一八世紀市民社会風俗小説の伝統と、ロマン派の反社会性と自然復帰思想と、女権主張の潮流とを、また時にはジェイン・オースチンのビーダーマィアー性さえも止揚して、打って一丸とした大小説家と申さねばなりません。ギャスケル女史の産業小説[20]と田園小説[21]の二元的追求、のちの、H・G・ウエルズの『アン・ヴェローニカ』のなかの新しい女の運命の追求などは、このジョージ・エリオットの流れの一斑を荷っております。

(6)

女権論の伝統の国イギリスには、また伝統的な女性蔑視も強烈であります。スウィフトの場合[22]は著名であり、サミュエル・バトラー

から、現代のモームに至るそれは、女権＝女性尊重と互いに拮抗しあって、女性像自体を深めてきたと申せると思います。

(7)

こう考えて参りますと、近世イギリス文学の女性像は、シェイクスピアのような、「百千の心をもった」作家は例外として、大体、二つの重厚な伝統に支えられているとみたいのであります。一八世紀市民社会風俗小説の、喜劇的本能的女性像と、ロマン派的な、悪魔的反世界のエロスとしての女性像と。前者は著しく形而下的であり喜劇的ですが、後者は形而下に基礎をおく超自然的なるもので、悲劇的精神と現実との間に橋を架けるものであります。この二つの重厚な綱に、さすが社会思想と産業社会の本家らしく、女権思想の追求者としての女性像という糸が、ビーダーマイヤー的小世界の家庭的調和を包摂して、女性蔑視の視線に耐えながら、織り込まれている、とでも言えるでありましょうか。

(8)

以上を以て、私の蕪雑な補足を終らせて頂きますが、これらから引きだしうるものとして、さしあたり、つぎの幾つかの疑問を提出し、各国文学の専門家の方々からの、御教示を拝ぎたいと考えます。

(1) ドイツ的悲劇の女性像を、ドイツにおける市民社会の未熟に由来する、むしろ特殊現象として考えるべきではないか、という私の考えは、間違っているのだろうか。[23]

(2) それに関聯し、市民社会風俗小説（及びその女性像）と私が仮りに命名したようなカテゴリーは、どの程度、普遍的なものであろうか。

(3) イギリスの場合の、ロマン派の悪魔的超自然の女性像は、ドイツ的なものとの接近を示してはいるが、それでも、かなり違っていると考えたい。それに関し、ノヴァーリスのゾフィー体験、ヘルダーリーンのディオティーマ体験、ネルヴァールのシルヴィー体験のようなものが、イギリス・ロマン派に認めがたいことをあげたいと思うが、この点につき、ドイツおよびフランス文学の研

究家諸氏から、さらに細かい御説明があることを望みたい。

以　上

〔付言〕以上は、六月二〇日のシンポジウムにおいて、補論を指名された際に、私が述べたことのままである。当日の雰囲気を保存せんがために、故意に、当日のメモに頼り、新たな書きおろし論文にすることを避けたものである。従って、そのようなコンテクストにおける発言という制約から、多くの遺漏が当然あるのであるが敢えて読者の寛恕を乞いたい。

以下、本文のさらに進んだ検討のために主として学生諸君の披見に役だつような文献を、註記しておく。従って、特例をのぞき、すべて簡単に入手しうる文献に止めてある。

(1) この点については、Ian Watt の画期的な論考 *The Rise of the Novel*, Chatto, 1957. および、Arnold Kettle : *Introduction to the English Novel*, Hutchinson's Univ. Lib, 1951, vol. I.

(2) デフォーのこの側面については、M.E.Novack : *Economics & The Fiction of Daniel Defoe*, Univ. of California, 1962. 及び大塚久雄「近代化の歴史的起点」学生書房、昭和二三、同上「近代化の人間的基礎」白日書院、昭二三、参照。

(3) 「シャッラ」は現代版として、Henry Fielding : *An Apology for the Life of Mrs. Shamel Andrews*, Edited, with an Introduction & Notes by S.W.Baker, Univ. of California, 1953 がある。

(4) 高島善哉「近代社会科学観の成立—アダムスミスの市民体系についての一研究」東京出版、昭三三、参照。

(5) スターン、マケンジーについては、Lawrence Stern : *A Sentimental Journey*, Edited with an Introduction by Herbert Read, The Scholartis Press, 1929. の序文、又、Henry Mackenzie : *The Man of Feeling*, Edited with an Introduction by Hamish Miles, The Scholartis Press, 1928 の序文を参照。

(6) G.H.Mead : *Movements of Thought in the 19th Century*, Univ. of Chicago, 1936, Ch.III 参照。

(7) G.Carman : *Southey & His Age*, Oxford, 1960 や参照。

(8) Roy Pascal : *The German Strum u. Drang*, Manchester, 1953, および、Werner W.Beyer : *The Enchanted Forest*, Blackwell, 1964 参照。ゲーテとイギリス文学については、やし当り、James Boyd : *Goethe's Knowledge of English Literature*, Oxford, 1932 を見られたい。

(9) 「マンク」の現代版は、M.G.Lewis : *The Monk*, with variants by Louis Peck, Ever Green Books, 1952 がある。邦訳に井上一夫訳「マンク—破戒僧」創元社、昭和三六、上下がある。

(10) 「不死のメルモース」の現代版は、C.R.Maturin : *Melmoth the Wanderer*, Introduction by W.F. Axton, Bison Books, 1961 がある。恐怖派の研究は、従来の Montaigu Summers 等のものは、書誌的には秀れているが、趣味的に流れ、この流派の社会的、文学的意味の究明において全く役にたたないものといえる。

(11) 拙稿「Coleridge の Mother-Image」「英語青年」一九六三、二月号参照。
コールリッジのこの側面の研究は今後の問題であるが、やし当り、J.B.Beer : *Coleridge the Visionary*, Chatto, 1959 および Harold Bloom *The Visionary Company*, Faber, 1962 を参照。

(12) 海老池俊治「ジェイン・オースティン研究」研究社、昭三八年。

(13) Mario Praz : *The Hero in Eclipse in Victorian Fiction*, Oxford, 1956, Part I の明析な探究を参照。

(14) D.H.Lawrence : *Studies in Classic American Literature*, Heinemann, 1964, Ch. VI, 参照。なお、この訳に後藤昭次訳「アメリカ古典文学研究」、表現社、昭三七、があるが、全く信頼できない。

(15) Hannah More : *The Works*, Fisher & Jackson, 1833, Vol. III. で読むことができる。

(16) 「ケイレブ・ウイリアムズ」の現代版は数種あるが最も入手しやすいものは、William Godwin : *Caleb Williams*, Reinhart Paperbacks, 1963。

(17) 白井厚「ウイリアム・ゴドウィン研究」未来社、昭三九、参照。

(18) Mary Wollstonecraft Shelley : *Mathilda*, Edited by E.Nitche, Univ. of North Carolina, 1959.

(19) 大内兵衛・節子訳「女性の解放」、岩波文庫。

(20) Basil Willey : *Nineteenth Century Background*, 1950. および、Jerome Thale : *The Novels of George Eliot*, Columbia, 1959. 参照。

(21) Raymond Williams : *Culture and Soicety*, Pelican Books. 参照。

(22) 堀大司「スウィクトその他」南雲堂、昭三五。

(23) この点について、宮下啓三氏から、「そのまま承認するほかはない」旨の、御返答があった。